

西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



▲若林墓地入口の題目石(若林2丁目) 此岸(この世)と彼岸(仏の悟りの世界)の境に建つという。



▲本了寺本堂前の題目石 大和川の川底に沈んでいたたので、左側面の文字に磨滅が目立つ。



▲落堀川中橋北東詰の本了寺題目石(若林1丁目) 東面に題目が大書きされる。右(北)が大和川土手の古市街道。



▲本了寺本堂(若林1丁目)に祀られている三宝仏 中央に「南無妙法蓮華経」、左に釈迦如来、右に多宝如来を祀る。中央奥に「大曼荼羅」が祀られている。

日蓮宗の本尊「大曼荼羅」「南無妙法蓮華経」の題目

先に、若林一丁目の日蓮宗・本了寺の歴史を記しましたが(歴史ウォーク)66・67・303)、今回は、本了寺が建てた題目石について紹介します。

題目石とは、日蓮宗を開いた日蓮が「南無妙法蓮華経」の題目こそが大宇宙の真理の法として、最も尊重されると説いたことから、その題目を刻んだ石造物をいいます。日蓮宗では、本尊である大曼荼羅は中央に「南無妙法蓮華経」の七文字が「ひげ題目」とよばれる独特の筆致で大書きされています。日蓮が仏教を興した釈迦の救済の世界を一幅の紙面に、絵画ではなく文字で書き顕わしたものです。

日蓮宗が開かれた鎌倉時代以降、日本仏教は「南無妙法蓮華経」の題目を信じるか、浄土宗や浄土真宗などの「南無阿弥陀仏」の念仏を信じるかの二つの流れを形成してきました。日蓮は念仏信仰を拒否し、題目信仰こそが、この世と未来の世にわたる救いが成就すると主張したのです。

題目石は、各地の日蓮宗寺院の門前などに、江戸時代以降、多く建てられ、「ひげ題目」で見られます。

若林集落の北側、大和川と平行して落堀川が流れています。落堀川は、宝永元年(一七〇四)、大坂城方面に流れていた大和川を今のように入方面

に改流した折、排水目的で同時に掘られた川です。江戸時代の若林村絵図を見ると、落堀川には三本の橋が架かっており、今も西橋と中橋が利用されています。絵図には西橋や中橋の名はなく、中橋は農通橋とよばれ、そのまま北へ大和川にも農通橋の名で延長されていました(歴史ウォーク)256)。

西南詰は、江戸時代の本了寺の寺地で、参道入口にもあたっていたのです。題目石の建つ落堀川と土堤をはさんで流れる大和川の間は、土堤を利用した街道となっていました。大坂と古市(羽曳野市)を結ぶ古市街道(大坂街道)で、往来する人々が題目石に目を奪われたことでしょう。

中橋の北東詰すべの土堤沿いに、題目石が建っています。東西南北の四面に、次のように刻まれています。

中橋題目石の五十年前の享保十六年(一七三二)十月十三日、日蓮入滅の四百五十年の御遠忌にも題目石が建てられました。現在、本了寺本堂前に置かれています。正面に「南無妙法蓮華経」、横文字で「本了寺」とあり、両側面に「日蓮大菩薩」と「享保十六年十月十三日建立」、「四百五十年御遠忌」などを刻んでいます。大和川の川底に沈んでいたたので、本了寺に戻したと伝えられています。

(東) 南無妙法蓮華経 寺本
(西) 五百歳中 廣宣流布
(南) 五百御遠諱 天明元辛丑年十月十三日
(北) 宗祖日蓮大菩薩

さらに、本了寺が関わったと思われる題目石が集落東端の新池そばの若林墓地の入口にも建っています。角柱型の石造物で、正面に「南無妙法蓮華経」と題目が大書きされています。江戸時代の先の二つの題目石とは形状は違いますが、本了寺がお祀りし、江戸時代中期ごろの建立と思われる。

日蓮宗が開かれた鎌倉時代以降、日本仏教は「南無妙法蓮華経」の題目を信じるか、浄土宗や浄土真宗などの「南無阿弥陀仏」の念仏を信じるかの二つの流れを形成してきました。日蓮は念仏信仰を拒否し、題目信仰こそが、この世と未来の世にわたる救いが成就すると主張したのです。

墓地は若林地区の共同墓地で、江戸時代以降、若林村では真宗大谷派の立法寺(歴史ウォーク)154・155)も檀那寺として信仰を集めています。数百年以上にわたって、両寺の檀信徒の奥津城として、お参りが続けられています。

題目石は、もともと集落側の中橋西南詰に建てられていました。それが、戦後の落堀川改修によって、西橋北東詰に移され、さらに数年前の落堀川改修で現在地に再移転したのです。中橋

中橋の北東詰すべの土堤沿いに、題目石が建っています。東西南北の四面に、次のように刻まれています。